２月総評

西躰　かずよし

作文のなかにだけいる兄と凧

榊　隆太　　東京都

「作文のなかにだけいる」のなら、兄はもうこの世にはいないのかもしれない。生きていたとしても、既にその頃の面影は失われてしまっているだろう。おそらく凧は、かつての記憶の断片として存在する。逆に言えば、「作文のなかにだけいる」という一節は、過去の事実は永遠にそこにありつづけるほかないものとして存在しつづける、ということを表している。

真夜中に
羽化をしているアコーディオン

小里京子　　北海道

羽化というのは決まって夜のものだろう。羽化とは蛹から成虫へと劇的な変化を遂げるものだから、アコーディオンの羽化というのは奇異に感じられる。それは、アコーディオンが成虫して別の何かになるという想像が、僕たちにはできないことと関係する。

「真夜中に羽化をしているアコーディオン」は成虫になることもなく、永遠に羽化しつづけるものとしてそこにあり続けるのかもしれない。

いわしぐも五つの頃はやさしくて

金光　舞　　埼玉県

「五つの頃はやさしくて」というのだから、今はもうやさしくはないのだろう。鰯雲がでたら天気は下り坂になることが多いといわれているけれども、その頃は、明日の天気のことを思い患うこともなかっただろう。その頃、わたしは、空一杯に広がる鰯雲を、まるで世界の不思議を見るような目で見ることができた。そしてきっと世界と手をつないでいること

もできた。この作品はそんなことを思い起こさせてくれる。

遺伝子の海辺
いなくなったあと
寂しくないようしおりを投げる

雲理そら　　大阪府

海辺といえば、いつか帰る場所のような気がするのは僕だけだろうか。遺伝子もそこに帰っていくのかもしれない。僕たちが死ぬときは決まって荼毘に付されるけれども、それでも記憶や遺伝子は、海辺へから海へと帰っていくように思う。
もしそうならば、いなくなることは当然の前提として書かれたということになるだろう。
「しおりを投げる」というささやかな行為。
いのりは、ささやかな行為としてのみ存在するものなのかもしれない。

きみたちがやってくるから
ぼくたちもむかっていくよ
おうだんほどう

和泉次郎　　新潟県

ぼくたちがそこに向かう理由なんて、何ひとつないことを、ぼくたちは嫌というほど知っている。それでも、そこに向かうのは、時には未来に手わたそうとすることが生きる理由になるから。
きみたちに横断歩道で会いたいと思うのは、きっとそれを思い出したから。

弟に殺されちゃった雪だるま

日下部　友奏　　群馬県

雪だるまにいのちはないのかもしれない。でも、その雪だるまが殺される。「殺されちゃ

った」というふうに、あっけなく。
　昨日会話を交わした人が津波で死んだり、たまたま隣に座っていた人が事故で死んだりと、生きている中ではときどき、あまりにも簡単な死に会うことがある。その人でなくて、僕でもよかったような死に。作品の死は、そうしたいのちのあっけなさを思い起こさせる。
　あまりにも簡単に殺されてしまう雪だるまは、殺す、殺されるといった関係が時に簡単に成立してしまうことを暗に表しているかのようである。

　　きょうりゅう、の、
　　言い方まるいね、
　　春うらら

玻璃　　愛媛県

　美しい作品というのは、あるのだと思う。それを定義づけることは難しいけれど。たとえばきれいなものを、正々堂々ときれいよっていうような場合。欲しいものを欲しいといっているような場合。そんなとき美しいと思う。
　この作品は、そんな意味で美しい作品だと思う。きょうりゅうという、まるい言い方、そしてそこから春うららにつながる。同じ作者の作品「もう帰ろう、／もうかえろうよと言う花野」というのもあるが、こちらも同様に美しい作品。

　　蝶の昼さりさりさりと砂時計

吉沢　美香　　宮城県

　砂時計の音が聞こえるということは、きっとないだろうけれど、音が聞こえるくらいに、その時間が眩しく感じられることはあるだろう。「さりさりさり」という音は時間とともに崩れていく砂の音を表しているかのようである。
　経過する時間の中で、昼の蝶のいのちもまた削られていくかのような錯覚に陥る。

　　じだんだを
　　すすきのように受け流す
　　母の　ほっきょくぐまのまなざし

さいう　　愛知県

母は憎悪と愛情の混ざった得体のしれないものとして描かれる。すすきのように受け流されることは、本質において救いなのかもしれないけれども、書き手は、それが今の自身にあっては救いにはなり得ないことを痛いほど分かっている。子はいつか母親の手から離れる。だからだろう。そのまなざしは、自身をどうしようもなく拘束するものとして存在する。

履歴書の　文字少なくて

現人　　東京都

履歴書の文字が少ないという。それは、ただ自身の履歴において語るべき文字の少なさを表しているように見える。

とりたてて多くのことをしたわけでもない。とりたてて語るようなこともない。懸命に生きてきたとしても、それが単純に社会的な評価につながる訳ではないだろう。

文字の少なさは、そうした言いようのない閉塞感を表している。

隣人が泣いてるのかと思った
生まれ変わってゆく雪の音

浪花　小槙　　東京都

「隣人が泣いてるのかと思った」ではじまる。では、隣人は泣いてないけれど、そのように聞いたということなのだろう。それは落胆でもなく、聞き間違いを悲しんでいるのでもない。

ただ、そのように聞こえたという驚きが、雪の音を生まれ変わらせるほどの衝撃をともなうものであったのだろう。それは自身に対する驚きであったに違いない。同じ作者の作品に「言えたはずのことを／舌の上で踊らせる夜／初雪はゴミ袋のようで」というのがあるがこちらの作品にも惹かれる。特に最後の一節。